

# 児童文化財を用いた先行研究に関する一考察

Discussion on Previous Studies Using the Assets of Child Culture

藤 重 育 子

Ikuko Fujishige

## (要約)

児童文化財は長年保育の現場において数多く使用されている。そしてその種類と用途、表現方法に関しては、その時々で異なっている。今回は、具体的に取り上げられている児童文化財の動向を先行研究や文献などから読み解いた。また、保育内容領域「言葉」の面から見た児童文化財についてまとめた。その結果、近年は児童文化財について子どもの生活に密着したあらゆるものを指すという変化が見られるようになってきた。種類や数においても明らかに増加傾向にあるものの、保育者がそれらを熟知し媒体としての活用方法を獲得していることが前提となるため、これまで以上に力量が試されるであろう。

## (キーワード)

児童文化財、保育内容領域「言葉」、先行研究

## 1. はじめに

児童文化財は、昔から現在の保育現場にいたるまで、教育的価値を見出され使用され続けている。そして、その種類と用途、表現方法に関しては、その時々で異なっている。しかしながら 2014 年 11 月現在において、「児童文化財」について国立情報学研究所の論文検索を行ったところ、論文・学会ポスターを併せてわずか 44 本であったことや、CiNii 所蔵論文が 7 本、学会ポスター発表が 11 本と少数であったことなどから、歴史は古いものの、未だ研究途上であることがうかがえる。また、腰山（2005）の研究においても、現代の児童文化の実情をもっと詳しく掌握することや保育実践の中での児童文化のあり方について、さらに検討を進めていく必要性を課題としている。

そこで、本論文では、先行研究をはじめ過去の児童文化財に関連した文献について読み解くこと、また時代の変遷などから見られる保育内容領域「言葉」の面から見た児童文化財についてのまとめ、現在の課題点を挙げる。

## 2. 児童文化財とはなにか

### (1) 過去に取り上げられている具体的な児童文化財より

表1. 先行研究・文献などに見られる児童文化財の記載

書籍	発行年	著者	児童文化財の具体的種類	児童文化財の捉え方
『児童文化』	1970年	中山茂	【技術としての児童文化】 口演童話、紙芝居、人形劇（指遣い人形劇やペーパーサートを含む）、児童劇、子どもの歌 【生産される児童文化】 玩具、児童図書、絵本と童画、複雑である児童漫画、映画と幻灯 【マスコミュニケーションと児童文化】 ラジオ、テレビ、児童雑誌、児童新聞	
『現代幼児教育シリーズ児童文化』	1980年	骨川道夫 中川正文 編	玩具（遊具）、絵本、お話、ストーリーテーリング、児童文学、マンガ、児童雑誌、児童新聞、ラジオとテレビ、紙芝居、人形劇、演劇、映画、音楽、遊戯	児童文化財と児童文化活動とが「児童文化」の概念を規定するとき、主要な内容をなすもの
『改訂 児童文化概論』	1986年	原昌 編	図書、雑誌、新聞、映画、ラジオ、テレビ、漫画、児童劇、人形劇、影絵、紙芝居、お話（ストーリーテリング・口演童話）、玩具、遊具、音楽、舞踊、造形	「子どもにまつわる文化活動」の結果として生まれた「事物・事象」
『児童文化の研究』	1987年	斎藤良輔 角屋和子 編	玩具、絵本、紙芝居、伝承遊び、テレビ（放送文化）、子どもの歌、遊び場、近所遊び	
『新保育と児童文化』	1995年	森上史郎 編	玩具、遊具、絵本、幼年童話、マンガ、紙芝居、人形劇、影絵、ペーパーサート、テレビ、視聴覚教材	・子どもの遊びの実態そのものであり、遊び遊具すべてが考えられる ・遊びと深くかかわり、楽しみながら世界を豊かに広げる ・自ら学びゆく力を育てる
『児童文化』	1995年	三上利秋 編	絵本、玩具、児童文学、紙芝居、スライド、OHP、人形劇、影絵（エプロンシアター・パネルシアターも含まれる）、あやとり、折り紙、手遊び、ファミコン、マルチメディア	現代の情報化社会を反映している
『現代の児童文化におけるJ B B Yの意味と価値について』	2006年	八幡眞由美 味と美味について	児童文学、絵本、挿絵、漫画、子どもの歌、少年少女向けの雑誌、ジュニア小説、童謡、わらべうた、映画、施設（ディズニーランドや遊園地、図書館、博物館、児童公園等）、遊具等の文化財、ボーイスカウト等の活動、行事	児童文化とは、子どもに関する文化の総称であり、子どもを中心捉えた全ての活動である
『児童文化がひらく豊かな保育実践』	2009年	中坪史典 編	絵本、紙芝居、童謡、人形劇、エプロンシアター、パネルシアター、ペーパーサート、手遊び、玩具、伝承遊び、わらべうた、折り紙、あやとり、ゲーム、コンピュータ、伝承文化や年中行事、児童文化施設	子どもの主体性を大切に「仲間」「時間」「空間」と子どもの生活リズムに合わせた「活動の間」が存在する場が豊かな物語=文化を生み出す
『ことばと表現力を育む児童文化』	2013年	川勝泰介 浅岡靖央 生駒幸子 編	わらべうた、あそびうた、ことばあそび、おはなし、絵本、童話、紙芝居、人形劇（パペット、マリオネット）、ペーパーサート、パネルシアター、エプロンシアター、おもちゃ	子どもの生活や遊びのイメージを膨らませるもの

児童文化（財）とは一般的に、子どものために作り出される文化（財）の総称を示し、児童文学や児童劇など種類は多岐にわたっている。いずれも正解や不正解などではなく、子どもの発達に関係するものや子どもの遊び・学びを発展させる上での媒体となるものは、全てそれに含まれる。まずは定義づけるため、児童文化財とは具体的に何を指し示すのかを過去の文献からまとめ、表1に示した。またそれらから見られる特徴を次に挙げる。

1点目は、マスメディアの存在である。特にテレビにおいては、時代の流れに変化を見ることがない。1970年代から常にマスコミュニケーションの一つとして取上げられており、2000年以降においてもコンピュータの表出が特徴として見られる。また、関連して、『児童文化』（三上,1995）では著者が指摘している通り、情報化社会の流れからスライドやOHP、ファミコンにいたるまで電子媒体も含めた文化財が具体例として挙げられている。それらに反して、1980年代に見られたラジオについては以降、示されていない。

2点目に、過去には子どもの歌と示されていたが、近年の児童文化としてわらべうたに変化していることが挙げられる。わらべうたについて中坪（2009）によると、子どもの遊びと結びついて歌われる遊戯性を持つこと、集団の年齢や性別、人数に適応してさまざまに変化すること、地域によってその旋律やリズム、歌詞などに違いがあり地域性が見られることの特徴を挙げており、集団性を高めたり、協調性を生み出したりして教育的効果が認められると示している。そのため、教育にも変化の起こった2000年以降、うた関連にも変化が見られたのではないだろうか。また同様に、その他の無形文化財が増加していることも特徴として挙げられる。

3点目は、これまで物が媒体となる文化財が中心であったが、2000年以降の児童文化財には、施設や行事自体など場所や空間を含めた形で挙げられていることが見て取れる。それらに関して、中坪（2009）はルールとマナーを体験的に学び、文化的な生活と社会性の発達を支えていると指摘する。絶対的ではないが、さまざまな行事や体験を通して子どもの視野が広がる可能性の一つであると思われる。

## （2）先行研究・文献より

児童文化財が子どもの好奇心や想像力を刺激し心の栄養となり、さまざまな発達を促すため、幼児期には欠かせない（八幡,2007）ことは明らかである。子どもたちを取り巻く社会環境や生活環境の中で、児童文化財はその心身の成長発達に大きな影響力を持っており（北村,2006）、腰山（2005）の主張するように、社会の進歩と時代の変化に対応して、児童文化も変貌し、児童の育成に有益となる文化の進展は歓迎されても良いと考えられている。次に先の研究・文献においてそれぞれ個々の児童文化財がどのように扱われているか見ることとする。

吉田ら（2007）によると、絵本・紙芝居は、日常の基本的な活動として定着していることと、子ども達を落ち着かせる場面で活用されることが多いことを説明している。よい絵本の条件を吉田（2005）は、絵と文章が調和していること、芸術性の高い絵と、美しくリズミカルな文章であること、内容は美しくためになるばかりでなく、残虐性・恐怖・不安・怒り・嫉妬なども描きつつ、それをプラスに転化する道筋を示すこと、などを挙げている。一見否定的と思われる表現については、林（2011）も以下のよう

に述べている。人は誰しも、日常的に自分の行く手を阻む「困難」や「力不足」「運命」「諦め」「弱気」といったものを持っていると考える。“鬼”的登場する話には、諦めずに努力し工夫すれば、それらに必ず打ち勝てるのだという励ましのメッセージが随所に込められている。そのメッセージは、子どもを楽しませながら、繰り返し日常的に伝えられてきた。子どもは“鬼”的話を聞きながら、日々自分の心に住むさまざまな“鬼”を主人公と共に退治するシミュレーションを繰り返しているとも言える。これらは、子どもにはもちろん、年代を問わず大人でも納得させられるものと感じる。現代では大人が子どもの育ちに対して願う内容の変化から、“鬼”的意味するもの、象徴するものも変化してきたといえる。以上のことから、数ページに示された世界の中で、人間形成や人間関係のあり方などを学習できるともいえるだろう。八幡（2007）によると、絵本はページをめくることによって自分が作品の世界の中に入っていく、つまり内に入る世界であり、一方の紙芝居は演じ手により作家の世界が空間に出ていき広がっていく世界、外に出る世界であることを述べている。そして、紙芝居を保育者が演じることによって子どもたちは紙芝居の世界に浸り、登場人物に共感したり感動を得たり考えたりできることや、子ども自身が今まで体験したことのない事柄や現実の生活の中では体験できない事柄に触れることで不思議さを感じ、未知の世界への想像力を深めていくことを主張している。演者である保育者のみならず、媒体そのものにも条件が付くようである。中川（2010）は、脚本や画が必要以上に観客を巻き込もうとすると、演じ手に高度な技術を要求するようになり、演じ手が熟練していないと昔ばなしの世界が途切れる可能性が高くなると分析している。

熊田（2011）は人形劇について、幼児は人形を擬人化し、想像的同一化をして物語の世界に入り込むといった経験をしながら一種の生活体験もしており、総合的経験を積むことができると示している。そして一人でも演じることのできるパネルシアターやエプロンシアターは、手軽に演じることのできる人形劇の一つであると加えている。そのため、絵本や紙芝居には見られない立体的な表現技法を用いることができ、保育者・子どもの双方において表現の広がりが見られるだろう。パネルシアターについては吉田ら（2007）が、子どものみならず多くの人々の心を捉えているのは、パネルシアターの絵やその手法が、絵本などの静止画とテレビなどの動画との間にあり、その両方の良さ、面白さを兼ね備えているのではないかと指摘している。テレビに関しては、子ども達の遊ぶ様子を見るとテレビの登場人物がごっこ遊びに登場することがよくあり、これは絵本・紙芝居・パネルシアターを見た後にごっこ遊びや劇遊びに発展するのと同じ効果を持つと分析（吉田ら,2007）しているため、一概に否定できない部分がある。利用方法や設定時間によっては、効果的であるだろう。

わらべうたや伝承遊びなどに関して、腰山（2005）が、時代の進歩との兼ね合いで価値を再認識して、継承する努力を要することを述べている。そのためには、地域で語り継がれている独特のものや、全国で広がりを見せているが内容が少しずつ異なるものなど現存している数多くある遊びについて、全てを把握することは不可能であるが、保育者が知識として把握して語り継ぐことのできるリカレント教育などの環境整備、実践内容をこれまで以上に養成教育で行う重要性を感じた。また、うた（手）あそびを学ぶ際に使用する市販の保育教材の問題点と学生の選択眼養成について、北村（2008）は童謡「どんぐりころころ」を素材にし、学生の音楽的能力（読み譜力・歌唱力・創造力・記譜力・コミュニケーション能力）

ン力)などの育成に効果が認められたことを発表した。うた(手)あそびは道具もいらず、その場で簡単に実践することが可能であり、その場を構成する子どもたちと先生との人間関係や信頼関係構築の入り口として機能しており、保育現場においても、たかがうた(手)あそびだからと軽視できない重要な位置を占めていることを示している。そして養成校の学生たちは、このような経験を積み重ねることによって、さまざまうた(手)あそびの良否の選択眼が養われることを指摘している。養成校教員としては、それらの能力を持ち備えた上で、卒業後に子ども達を前に力を発揮してくれることを願っている。

八幡(2006)の報告からも分かるように、今やディズニーランドや遊園地も児童文化の一つとして考えられており、北村(2006)の言葉を引用すると、現代では子どもと関わりを持ち子どもの生活や心身の成長発達に益する文化を、広義の意味で児童文化と呼ぶ。また、若山ら(2008)は、大学・短大が「文化的な物を保有している施設」—図書館、児童館などとは異なる、やわらかな／かたちなき文化財であることを示している。広大な敷地を持ち、建物や施設、さまざまな文献や資料、人的資源などの物理的な財を数多く所有していることから、物理的な財を地域に開かれたものにするだけでなく、こうした財を活用して地域におけるさまざまな営みを支え、人々のあいだの結びつきを促進する潤滑油としての役割を果たすことが必要とされている。

### 3. 保育内容領域「言葉」の変遷と児童文化財との関連

幼稚園教育要領改訂に伴って変化する保育内容領域「言葉」の中に見られる児童文化財のあり方について、表2に示した。保育現場において紙芝居が多用されているにも関わらず紙芝居に関する研究が未だに途上である(八幡,2007)ために、保育内容領域「言葉」では、現在でも「絵本や物語などに親しみ、興味を持って聞き、想像する楽しさを味わう」と表記されており、物語という言葉は見られるものの具体的に絵本以外の児童文化財として記されていない。また学校教育法第23条においても「日常の会話や、絵本、童話等に親しむことを通じて、言葉の使い方を正しく導くとともに、相手の話を理解しようとする態度を養うこと」と表記されているが、紙芝居や他の文化財を示す名称は見つからなかった。このような点から、「児童文化財=絵本」と考えられる所以であるかもしれない。しかしながら、領域名から焦点を当てると、「言語」では言葉自体を正しく使用することに捉っていたのに対し、「言葉」では、生活の言葉を育てるに重点を置いていることから、物語の情報源はどうであれ、さまざまなものに触れ、楽しさを味わう中で、言葉での表現が豊かになっていくものと考えられる。

表2. 保育内容領域「言葉」における児童文化財の変遷

改訂年	領域名	幼稚園教育要領 本文	具体物	児童文化財関連
昭和31年	言語	言葉の使い方を正しく導く	絵本、紙芝居	絵本を楽しむ
昭和39年	言語	言葉の正しい使い方を身につけるようにする	絵本、紙芝居	絵本に親しむ
平成元年	言葉	言葉に対する感覚を養う	絵本	楽しさを味わう
平成11年以降	言葉	言葉で表現する力を養う	絵本	楽しさを味わう

#### 4. おわりに

表1でも見られたように、児童文化財が変化をとげているということは、中坪ら（2009）も注目しており、1960年代後半以降は子どもの生活に密着した文化、子ども主体の文化という考え方が主張されるようになったこと、そして現在は子ども自身がつくり出す文化と、子どもに与えられる文化の両方の意味で児童文化が扱われていることを述べている。工藤（2009）も、児童文化には子どもから子どもへ伝える文化と大人が子どもに伝えたり与えたりする文化があることを説明している。子どもの主張が受け入れられるようになり、より自由により幅広く、本来であれば多様な表現が見られるはずである。しかしながら、同時にそれを阻む解答のような文化財が増加している事実や、それに安心してしまう面がある。それは、現代の保育者や親世代が自然を相手に遊べなくなってきたこと（中坪,2009）とも関係しており、遊びをあまり知らなかつたり、遊びを広げられなかつたりする状況が生じている。とともに、携帯電話やスマートフォンを用いた通信やゲームでの遊び方が巧みになり、それは、保育者のみにとどまらず、子どもにも大きな影響を与えている。また情報機器をより低年齢のうちから使いこなし、ものが溢れているこの時代に、実在する児童文化財に目を向けて、相手の姿が見えないものとのやり取りを楽しむということがもしもあるならば、皮肉な結果である。表1で示したように、一つひとつを見ると40年間でそう大きく変化したものは挙げられていない。そのため再度ものの善し悪しを見極める選択眼が必要となるだろう。種類や数においても明らかに増加傾向にあるものの、保育者がそれらを熟知し媒体としての活用方法を獲得していることが前提となるため、これまで以上に力量が試されることとなる。最後に、大日方ら（2014）は、保育者養成学生の創造することや発信力の欠如などを指摘しており、上記の問題は保育者のみに関わらず、保育者自身が創造性を持って主体的に活動できるよう、養成機関としての課題があるとも考えられた。

#### 【引用文献】

- 原昌編（1986）『新訂 児童文化概論』建帛社
- 林鎮代（2011）「象徴としての“鬼”と“トッケビ”－子どもに語る昔話から－」関西国際大学研究紀要第12巻 pp.25-35
- 今井田道子（2006）「今＜児童文化＞を考える2」横浜女子短期大学紀要第21巻 pp.101-124
- 川勝泰介・浅岡靖央・生駒幸子（2013）『ことばと表現力を育む児童文化』萌文書林
- 北村恵子（2006）「保育現場における児童文化財について そのI－音楽的環境作りの視点からの手あそび」上田女子短期大学児童文化研究所所報第28巻 pp.27-35
- 北村恵子（2008）「保育現場における児童文化財について そのII－市販教材に見られるうた(手)あそびの問題点と学生の選択眼－」上田女子短期大学紀要第31巻 pp.123-135
- 腰山豊（2005）「短大保育科における実践的指導力の形成と授業改善（9）－児童文化財と保育のかかわり－」聖園学園短期大学研究紀要第35巻 pp.1-10
- 工藤真由美（2009）「現代児童文化の一考察」四条畷学園短期大学紀要第42巻 pp.18-20
- 熊田武司（2011）「保育士のパネルシアターおよびエプロンシアターへの意識について」岐阜聖徳学園大学短期

## 児童文化財を用いた先行研究に関する一考察

- 大学部紀要第 43 卷 pp.117-129
- 三上利秋 (1995) 『児童文化』 保育出版社
- 森上史朗編 (1995) 『新 保育と児童文化—保育文化を育む—』 学術図書出版社
- 中川理恵子 (2010) 「昔ばなし紙芝居に関する一考察—『おだんごころころ』と『だんごとじぞう』の比較をとおして—」 埼玉学園大学紀要人間学部篇第 10 卷 pp.389-404
- 中坪史典編 (2009) 『児童文化がひらく豊かな保育実践』 保育出版社
- 滑川道夫・中山正文 (1980) 『現代幼児教育シリーズ児童文化』 東京書籍株式会社
- 中山茂 (1970) 『児童文化』 朝倉書店
- 大日方重利・藤重育子 (印刷中) 「保育専攻学生の社会人基礎力と施設保育実習後の自己評価の関連」 静岡産業大学経営学部研究紀要第 20 卷第 1 号
- 斎木恭子 (2004) 「児童文化財を活用した保育実技の質的向上を考える」 鳥取短期大学研究紀要第 50 記念号 pp.151-160
- 斎藤良輔・角尾和子 (1987) 『児童文化財の研究』 川島書店
- 若山哲・山口美和 (2008) 「大学と地域ネットワークとの協働による子育て支援—児童文化財の新たな形としての子育て広場のあり方を考える—」 上田女子短期大学紀要第 31 卷 pp.69-80
- 八幡真由美 (2006) 「現代の児童文化における JBBY の意味と価値について」 高崎健康福祉大学紀要第 5 号 pp.123-138
- 八幡真由美 (2007) 「児童文化財の保育における効用に関する一考察—領域言葉の側面から紙芝居を中心に—」 上田女子短期大学紀要第 30 卷 pp.39-47
- 吉田博子・藤田淑子 (2007) 「幼児教育における児童文化—実習保育所における児童文化の現状について—」 淑徳短期大学研究紀要第 46 卷 pp.131-143
- 吉田照子 (2005) 「物語絵本の心」 福岡女子短大紀要第 65 卷 pp.17-32